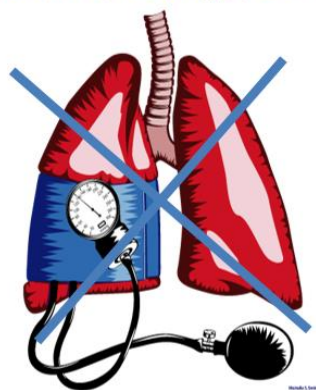


肺高血圧について

「高血圧」という病名は皆さん良く御存知かと思いますが、「肺高血圧」という病名は聞いたこともないという人がほとんどではないでしょうか。高血圧が身体の動脈圧（血圧）が高い病気であるように、肺高血圧は肺の動脈圧が高い病気です。血圧はマンシエットを腕に巻いて測れるため、高血圧の発見は比較的容易です。一方肺動脈圧はカテーテルという細い管を、心臓を経由して肺動脈まで挿入しないと測れませんので、肺高血圧の診断は非常に難しく遅れがちです。また通常、肺動脈圧は血圧の1/5~1/4程度と低く、更に肺には予備血管（血液が流れていない虚脱した血管や、周囲が柔らかいため拡張しやすい血管）がたくさんあるので、容易には肺高血圧になりません。逆に言えば、肺高血圧が診断された時には、すでに病気がある程度進行している状態なのです。

図1 肺高血圧

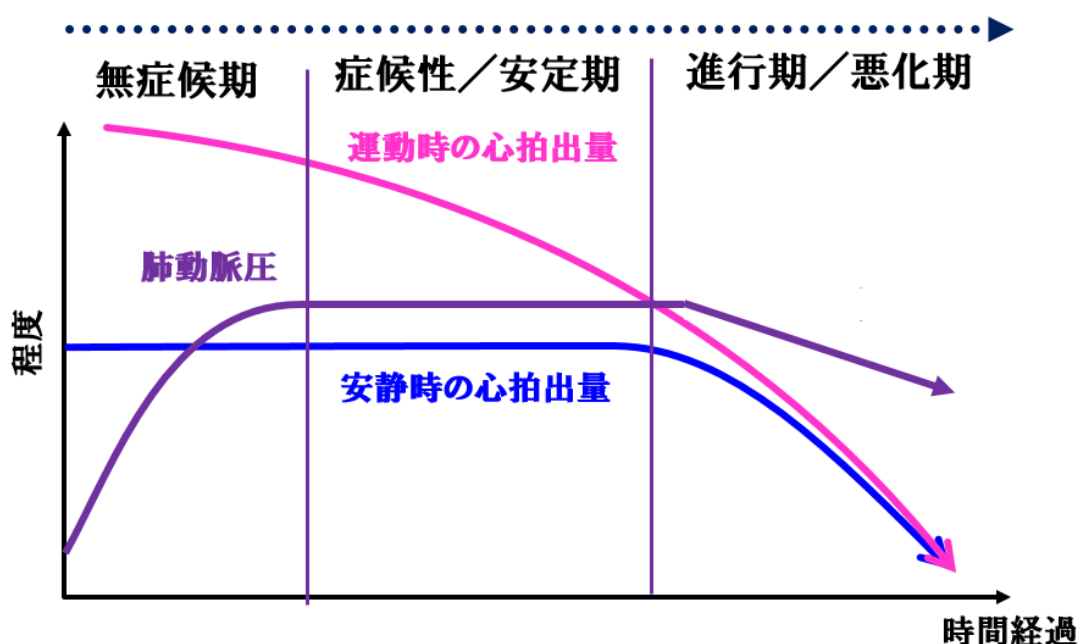
身体の血圧と違い、
肺の血圧は容易には測定できません



高血圧は大人に圧倒的に多い病気ですが、肺高血圧は大人だけでなく、こどもでも比較的多く見かけられます。原因は様々で生まれつきの心臓病、未熟児などで肺の発育が悪い場合や、肝臓が悪い場合など「続発性」に起こったり、原因となる病気が無く細い肺動脈自身が原因不明の「特発性」の病気であったりすることも比較的多いのです。

最初に認められる症状はどんな病気でもよく見られる、運動時の疲れやすさや息切れなので、日常生活での疲れや単なる怠けのように誤解されることも多いです。進行すると肺の血液循環が停滞するため、肺胞からの酸素の取りこみが障害され爪や唇の色が紫色になります。肺へ血液を送っている右心室も疲れきて、顔や脚がむくんできます。更に進行すると胸痛や失神などの症状が現れて、初めて診断に至ることもあります。一方、日本にしかないマス・スクリーニングとしての学校心臓検診では心電図検査が施行され、その結果から発見されることもあり、このシステムは肺高血圧の早期発見に役立っています。

図2 肺高血圧の臨床経過



肺高血圧の中でも肺動脈性肺高血圧という肺動脈の病変を特徴とする病気は、20年ほど前に難病指定されており、その頃は治療薬がありませんでした。肺動脈性肺高血圧は細い肺動脈が侵される進行性の病気です。主要な病態は当初「血管の過剰な収縮」なのですが、進行すると「血管壁の肥厚」が生じてきます。血管壁の肥厚も最初は回復する可能性のある可逆的な変化なのですが、進行すると回復しない非可逆的な変化になってしまいます。そのため早期発見と早期治療が重要なのです。

図3 肺高血圧の臨床経過



わが国でも 1999 年に画期的な静脈内注射薬が使用されはじめ、2005 年からは経口薬が使用できるようになり、現在までの 10 年あまりで 7 種類の経口薬、1 種類の吸入薬と 1 種類の皮下注射薬が使用できるようになりました。以前は肺高血圧と診断されると 2 年半ほどで亡くなる方が多かったのですが、現在は多種類の薬剤を早期に併用することで、病児の予後は大いに改善されてきました。そうは言っても完治させることはまだまだ難しく、今後の新規治療薬の開発などが期待されています。究極的な治療法である肺移植の成績は必ずしも良くないので、肺高血圧の治療戦略の基本は早期発見と早期治療に尽きます。そのため肺高血圧が疑われた場合には、できるだけ早く専門施設を受診することをお勧めします。